自己愛的傾向・対人恐怖の傾向と対人葛藤場面における他者意図の判断

○相澤直樹

(神戸大学大学院人間発達環境学研究科)

キーワード：自己愛的傾向，対人恐怖の傾向，他者意図の判断

On relation between narcissistic tendency, anthropophobic tendency, and negative intent interpretations in interpersonal conflict situations

Naoki AIZAWA

(Graduate School of Human Development and Environment, Kobe University)

Key Words: narcissistic tendency, anthropophobic tendency, negative intent interpretations

目 的

自己愛的傾向と対人恐怖の傾向（ないしは、過敏型自己愛的傾向）は、ともに思春期青年期心性を知る上で重要なキーワードとなっている（小塩・川崎，2011）。思春期・青年期は、心理発達過程の中で親の傘下にあった子ども時代を離れ、自覚と自立が問われる成人期に向かう時期にあたる（辻，2008）。その中で、とくに現実の自己に出会うことが重要な要因となると考えられ、両傾向はその不全に関連する可能性がある。現実の自己への気づきが自己の独立性、ならびに、自他の分化への気づきをもたらすことを考慮すると、自己愛的傾向と対人恐怖の傾向は、意図や情緒などの主観的体験の自他の間での未分化さや混同に関連することが想定される。

Kernberg (1975) は、自己愛的人格障害の患者が憤怒（敵意）を外部に投影することを指摘した。このことは、Dodge ら (Crick & Dodge, 1994) の指摘する敵意帰属バイアスに近い。したがって、自己愛的傾向は、敵意帰属と正の関連を示すことが仮定される。一方、相澤 (2011) は、対人葛藤場面において他者の嫌悪を認知しやすい傾向として嫌悪判断の概念を提唱し、対人場面における不安や過敏さに結びつくことを示した。したがって、対人恐怖の傾向はこの嫌悪判断と正の関連を示すことが仮定される。本研究では、以上の関連を一般青年男女を対象とした調査研究により検証した。

方 法

調査協力者・調査期間 調査協力者は、4 年制大学に通う大学生 329 名（男性 150 女性 179, 平均年齢 19.78±0.93）。調査は、講義中に質問紙を配布しその場で回収した。調査時に研究の意義、質問紙の管理、参加への任意性を説明し、同意の上で回答するように求めた。調査期間は2012年1月～3月。
質問紙の構成 下記の尺度を含む質問紙を調査協力者に実施した。①自己愛的人格項目群：自己愛的傾向の誇大特性と過敏特性を測定するために相澤（2002）により作成された自己愛的項目群 48 項目を用いた。この尺度は 7 因子構造が確認されており、自己愛的傾向を測定する 4 下位尺度（自己誇大感、賞賛願望、権威的操作、自己愛憤怒）、対人恐怖の傾向（過敏特性）を測定する 3 下位尺度に分けられる。「1. あてはまらない～5. あてはまる」の 5 段階評定。②場面想定法による対人葛藤場面における他者の意図の判断測定法：場面想定法による敵意帰属、ならびに、嫌悪判断を測定するために相澤（2011）により作成された意図判断測定法を用いた。敵意帰属の測定では、架空の対人挑発場面（意図の不明確な他者から何らかの危害を加えられる場面）3 場面を協力者に提示し、実際にそのような出来事を体験したと想定させ、その際の敵意帰属、非敵意帰属、ならびに、怒りの感情をそれぞれ 7 段階で評定させた。嫌悪判断の測定に際しては、架空の対人疎外場面（他者との間の結びつきが何らかの形で断たれる場面）3 場面を調査協力者に提示し、同様にして嫌悪判断、非嫌悪判断、不安感を 7 段階で評定させた。

Table1

自己愛的傾向、対人恐怖の傾向と意図判断測定法の相関

	対人挑発場面			対人疎外場面		
	敵意帰属	非敵意帰属	怒り	嫌悪判断	非嫌悪判断	不安
自己愛的傾向						
自己誇大感	.052	-.043	.146 *	.006	.066	-.037
賞賛願望	.008	-.007	.127 **	.003	.062	.002
権威的操作	.070	-.201 **	.161 **	.068 **	-.044	-.009
自己愛憤怒	.201 **	-.182 **	.357 **	.178 **	.081	.232 **
対人恐怖の傾向						
対人過敏	.144 **	-.058	.124 *	.425 **	-.314 **	.507 **
対人違和感	.085	.004	.029	.305 **	-.219 **	.321 **
自己萎縮感	.100	.011	.023	.297 **	-.210 **	.312 **

*p<.05, **p<.01.

結 果

自己愛的人格項目群は相澤（2002）の 7 下位尺度に従い、それぞれ下位尺度得点を算出した。意図判断測定法は、対人挑発場面 3 場面の敵意帰属項目得点、非敵意帰属項目得点、怒り項目得点をそれぞれ合計して、敵意帰属得点、非敵意帰属得点、怒り得点とした。対人疎外場面 3 場面についても同様に処理し、嫌悪判断得点、非嫌悪判断得点、不安得点とした。その後、自己愛人格項目の下位尺度得点、ならびに、意図判断測定法の各得点の間で相関係数を算出した（Table1）。

その結果、自己愛的傾向は、権威的操作と非敵意帰属の間で弱い負の相関、自己愛憤怒と敵意帰属、ならびに、怒りの間で弱い正の相関がみられた。そのほか、怒り得点は、自己誇大感、賞賛願望、権威的操作と間で有意な正の相関を示したが、数値自体は無相関を示唆する程度にとどまった。一方、対人恐怖の傾向は、いずれの下位尺度でも嫌悪判断、ならびに、不安得点との間で有意な正の相関、非嫌悪判断との間で有意な負の相関が示された。特に、対人過敏と嫌悪判断、ならびに、不安との間では中程度の相関を示す値が得られた。

考 察

自己愛的傾向については、自己愛的憤怒と敵意帰属、ならびに、怒りの間で仮説を支持する結果を得た。対人恐怖の傾向については、すべての下位尺度で嫌悪判断、非嫌悪判断、不安得点との間で仮説を支持する結果を得た。

引用文献

- 相澤直樹(2002). 自己愛的人格における誇大特性と過敏特性 教育心理学研究, **50**, 212-225.
相澤直樹(2011). 対人葛藤場面における他者の意図の判断と情緒反応について 心理臨床学研究, **29**, 365-370.
Crick,N.R. & Dodge,K.A. (1994). A review and reformulation of social information-processing mechanism in children's social adjustment. *Psychological Bulletin*, **115**, 74-101.
Kernberg,O.F.(1975). *Borderline Conditions and Pathological Narcissism*. NY: Jason Aronson.
辻悟(2008). 治療精神医学の実践 創元社
小塩真司・川崎直樹(2011). 自己愛の心理学 金子書房